

令和4年度

研究主題

“いま”を生きる×“これから”を生きぬく力を育む保育

～多様なステキと向かいあう子供たち～

研究の概要

1. 研究主題について

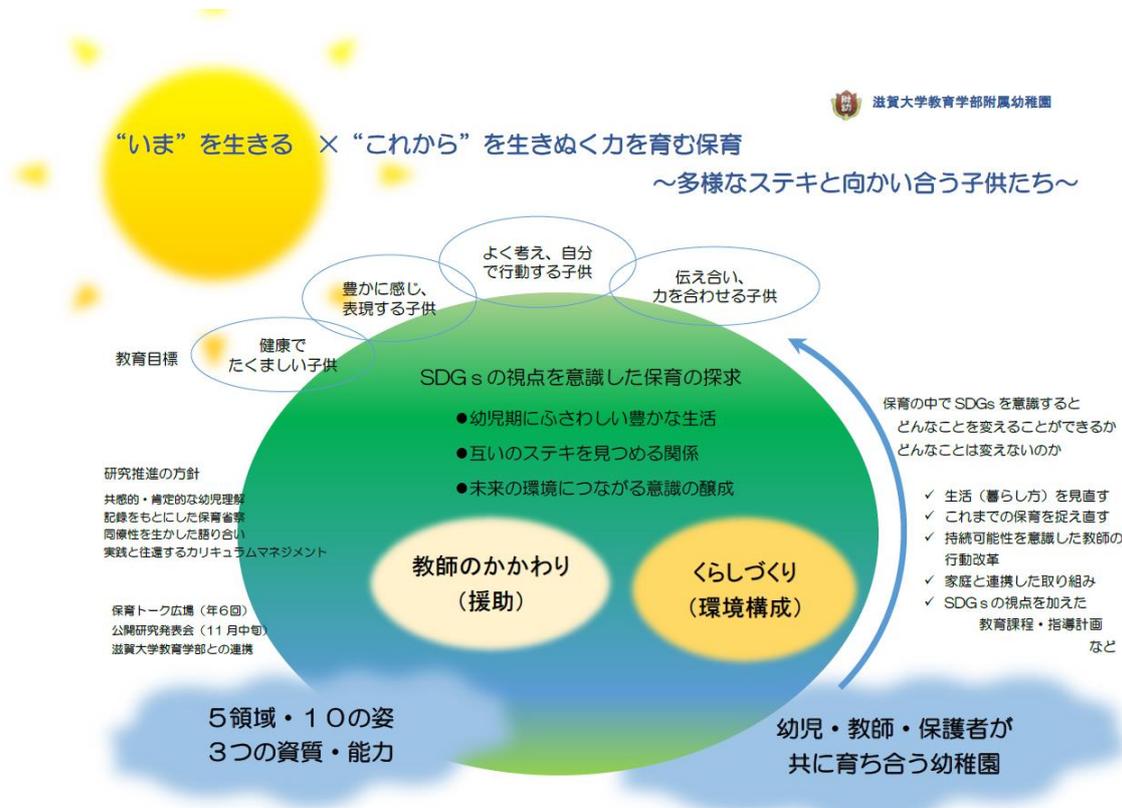
世界中で幼児期の教育の重要性が叫ばれている昨今です。社会の人に幼児教育の意義を効果的に伝える方法を新たに開発したいという思いはあるものの、幼稚園での教育内容はなかなか外に向かって発信しきれていない現実を私たちはもどかしく思っていました。そんな折、滋賀大学教育学部幼児教育講座の学生がSDGsをテーマにした遊びを携えて園に訪れたことから、私たちの研究は始まりました。社会全体で関心の高まっているSDGsと関連して保育研究を行うことは、社会全体の方に幼児教育の意義を語り掛けるものとなるのではないかという予感があったからです。SDGsの目指す将来に必要な資質から逆算し、幼児教育で果たすべきことが明らかになれば、自ずと“いま”すること、つまり幼児期の教育の役割を説得力を持って発信することができるのではと考えました。

滋賀大学附属学校園は、共通の教育理念として「いまを生きる」を掲げています。「いま」を充実して生きることを積み重ねていくと同時に、今をどのように生きることが「これから」の未来につながるのかを、学校園を通して問い続けていく…この理念を踏まえ、多様性への対応が求められるであろう「未来（これから）」へとフォーカスを合わせると同時に、改めて「いま」を考えたいとの願いから、「“いま”を生きる×“これから”を生きぬく力を育む保育～多様なステキと向かい合う子供たち～」を、研究主題として設定しました。

幼稚園教育要領前文には「あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培うことが求められる」と記されています。「多様な人々と協働しながら」とあるように、多様性を受け入れ合ったうえで一緒に暮らしていく、つまり共に生きる“共生”ということが求められるこれからの時代、多様な人やもの、こと、文化や習慣にどう向かい合うのか、さらに問われることでしょう。幼児期の教育においても、幼稚園教育要領に示される「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や「5つの領域」の視点を基本に置きつつ、“多様な”という観点から保育の新たな視点を見出す必要があると考えます。

そこで、“これから”を生きぬく力を育むためのキーワードを「多様性」「共生」としこの二つのキーワードを手掛かりに持続可能な社会の創り手を育む保育の在り方を探ることにしました。

本研究の概要図です。



2. 研究の目的 SDGsの視点を意識した保育の探求

「持続可能な社会につながる力の育成」

- 持続可能な社会の担い手となるためには、幼児期にどのような資質や能力を育むべきなのか、そのためにはどんなことが保育に求められるのかを展望する。
- “いま”から“これから”へという視点を持つことで、幼児を理解しようとする教師の眼差し、言動の変容を目指す。

「幼児期にふさわしい豊かな生活」

- 今あるモノや環境を変えるのか・変えないのか、その都度向かい合い、未来につながる生活を子供たちと共に作り出すことを目指す。
- 保育の中にある当たり前の要素とSDGsの概念とのつながりを可視化し、未来を見据えた幼児教育の意義や役割を明らかにしていく。

3. 研究の方法

- 多様性と共生をキーワードに事例検討を行い、SDGsの視点から遊びを含めたくらしを見直す
- 教育課程との照らし合わせにより、今の姿とこれからの育ちを確認し、実践の評価を行う

事例検討では、幼稚園版アイコンの視点を使い、今の姿がどのような育ちへとつながるのか、未来を見据えて考察を深めていく。

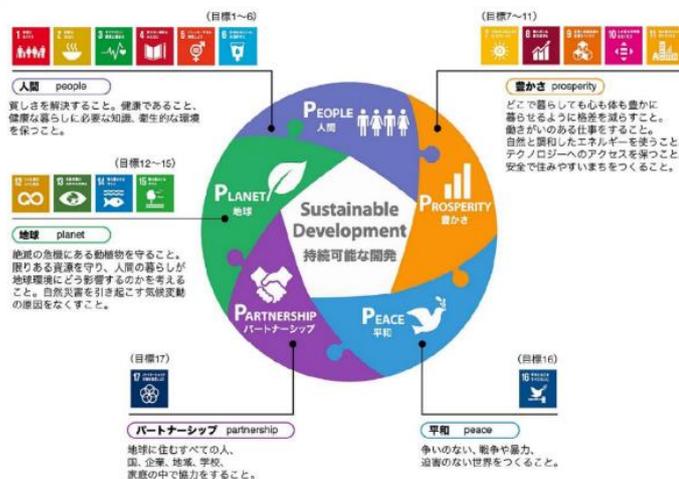
・幼稚園版アイコンについて

SDGsを幼稚園の生活や活動に重ねて捉える手がかりとして、幼稚園版のアイコンを考案しました。このアイコンはSDGsの17の目標を踏まえ、幼児期に大切にしたいことを保育事例から抽出し、6つのカテゴリーに分類したものです。幼稚園教育要領に示される「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や「5つの領域」を踏まえ、本園の教育目標につながる幼児の姿をイメージしています。

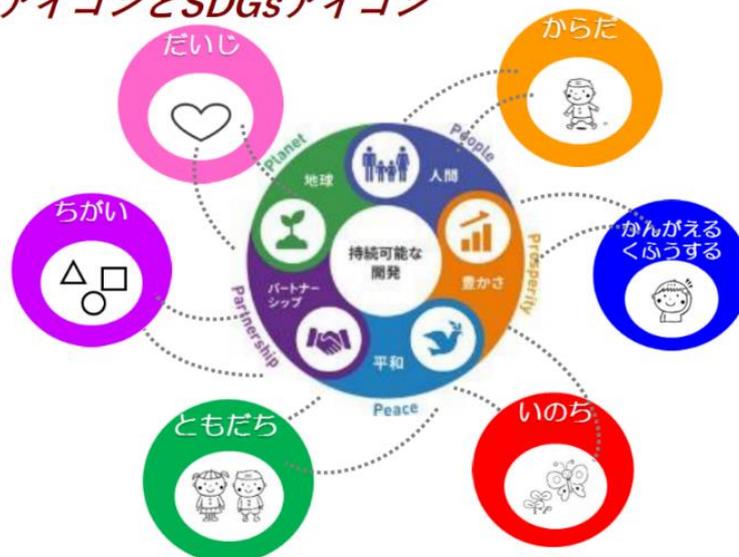
・ 幼稚園版アイコンとSDGsの17の目標について

幼稚園版アイコンは、SDGsの17の目標の一つ一つに対応させるのではなく、SDGsが目指す持続可能な世界を5つのキーワードで説明した「5つのP」と呼ばれる枠組みから、包括的な育ちの方向性として考案しました。なぜなら、幼児期の子供の姿には、いくつもの育ちの要素が含まれており、将来的にどのような力につながっていくのかも一つに絞り切れるものではないと考えるからです。

5つのP



幼稚園版アイコンとSDGsアイコン



研究のまとめ

1. 研究の成果と課題

「持続可能な社会につながる力の育成」について

幼稚園版アイコンを作成したことで、今の保育の実践が、SDGsにどうつながっていくかを可視化し、今と未来を見据える視野をもつことを共有していくことができました。普段、自然に行っている教師の関わりが、無自覚ではあっても未来につながることを願っているということが、事例検討で浮かび上がりました。しかし、習慣的に行っている関わりや環境設定が、遊びの盛り上げのみにフォーカスしていることがある、ということも自覚させられました。いずれにせよ、教師の思いや関わり方、環境設定を見つめなおすことは大切で、その際に幼稚園版アイコンは有効に活用できると確信しました。

本研究では6つのアイコンを作成しましたが、アイコンがSDGsの17の目標とどうリンクしているか、加えて、アイコン自体の意味の検証も実践を通して引き続き行っていくことが今後の課題です。また、事例検討は語る行為そのものに保育の探求があり、語り合うことで生まれる問いが実践を豊かにしていくことを実感しました。アイコンはあくまでも考察の視点、方向性を持つためのツールであることに留意したいと思います。

環境面からのアプローチとして、コンポストやエコプランターなど幼稚園の生活に取り入れてきましたが、どのような取り組みにおいても、“実際の子供の姿を一括りにせず、様々な感じ方や捉え方があることを読み取る”ことが大切であることを再確認しました。その上で改めて“一人一人の子供の姿を多様性と共生の視点で振り返る”ことを意識するようになりました。

このように、教師の気付きや意識の持ち方については変容を感じることができたのですが、子供の変容を語ることの難しさにもまた直面しました。それは、いくつもの育ちの要素が直接的、間接的に影響しあって育まれる幼児期の子供の姿を語ることの難しさでもあります。幼児教育の本当の成果が像を結ぶのは子供たちが大人になった“未来”であることに謙虚に向き合い、これからも充実した“いま”を生きる保育をしっかりと実践していきたいとの思いを新たにしています。

「幼児期にふさわしい豊かな生活」について

普段の幼稚園の環境の中にも、生ごみを土に返すコンポストの設置やエコプランターを使っただけの栽培活動、外国の方と交流する機会を作るなど、日常、つまり“いま”の暮らしに直接的な活動、環境にSDGsを意識して取り入れていくことは、子供たちが見聞きし、触れていく、暮らしそのものを変えていくという点で大きな意味があることだと考えています。このように、“いま”を充実させることを大切にすると同時に、将来SDGsの問題を学び実践できる年齢に成長した時に、例えば地球の環境問題を自分事として捉えることのできる人、平和や人権にかかる問題に敏感に心を動かすことのできる人、そのような資質はどのように培われるのか、持続可能な社会の担い手となる人材の育成を見通した時、幼児期に何を育てる必要があるのか保育全体を俯瞰し改めて考えてきました。

例えば、ゴミ（資源）の分別という取り組みでは、自然の循環やリサイクルなど、活動の全貌を子供が理解して行動することはまだ難しいですが、一緒に生活していく中で、教師の意識の向け方や振る舞いを伝達していくということが大切であると感じました。また、未来を見据えることで、各年齢に応じた環境設定になっているか、子供の発達に応じているかという幼稚園教育の基本に立ち戻ることを忘れてはならないと、改めて気づかされました。

幼児期から取り組むSDGsは“物や情報の多さ＝豊かさ”ではなく、“減らす＝環境にやさしい”でもありません。自分達を取り囲む物や情報を見つめ、選ぶ力が未来へつながるのではないかと思います。遊びを通して学び、必要な力を培っている幼児期だからこそその取り組み方をさらに追及していく必要を感じています。子供たちが遊びや生活の中で、よく見ること、自分で考えること、様々な捉え方をすること、人とつながること、命を愛しむこと、生きることを楽しむこと、より良く生きたいと願うこと… これらすべてが保育そのもの、幼児教育の目指す人間育成と合致することを改めて確認し、私たちの実践が確実に未来につながることを確信しているところです。

今年度、保護者の方にはアンケート調査等ご協力いただき、共に研究を進めるための一歩を踏み出しました。幼児期は家庭との連携が不可欠であることから、今後も子供の姿や実践を視覚的に発信していく工夫をし、家庭との連携をさらに深めていきたいと考えています。

また、幼稚園から一番近い未来である小学校との連携においても、架け橋期の子供の姿を捉える見方の交流を無理なく継続し進めていくことで、幼児期にふさわしい豊かな生活を考えていくことにつなげていきたいと思えます。